

西日本新聞 23<sup>th</sup>.Jul. 1977

### 愛を歌う曼陀羅

この三年ほどフランスで制作している桜井孝身さん（福岡県大野城市）が一年ぶりに帰国、福岡市中央区大名二、福岡画廊で近作を発表している。人間への限りない愛を歌った『バラダイスへの招待』シリーズ。八月三日まで。

桜井さんは五〇年代から六〇年代にかけて日本の美術界に一大波紋を巻き起こした『九州派』のリーダーだった。

その後サンフランシスコに移り、各国の芸術家たちとコミュニオンやづくりの運動をするなど十年ほど文化活動が続けていたが、アメリカの前衛美術の退潮にともない、フランスに移った。その間もずっと福岡の美術運動ともかかわりをつづけ、今回の帰国も、十九日から一週間開いた『77 今日の美術展』（福岡県文化会館）の開催を兼ねた個展。つねに運動の炎中に身を焼かないとすまない画家である。手製のキャンバスに描かれた『バラダイスへの招待』は、人間に対するこよない愛を表現した賛歌である。キリストのような、仏陀のような人たちが、もろ手を上げてこの世の平和を賛えている。いくぶんポットアート気味に稚拙さを装って描かれた、赤みを帯びた顔々の行列や、流れる雲や巨大な鳥に乗って浮遊する人物群で埋まる画面は、現代社会の憂陀羅図ともとれる。

桜井さんは『悩みの多い人は私の絵を見てしあわせになってください』と語りかける。工芸的な要素まで加えて、克明に、ねばり強く描かれた画面からは、ほのぼのと温かいムードが漂う。この人にとって絵を描くこと自体が、平和を呼び込む運動なのだろう。人間を賛美する人物たちの中には、時おり涙がためられ、さびしい表情も見られる。大声で平和をさげびながら、けっして心のすみの悲しみや無力感を消すことができない画家のむなしさをそこに見るのは、うがちすぎだろうか。